

公正・不偏の視点から世界をとらえる——思いこみの世界史——

元駐トルコ・ミャンマー大使 山口洋一

外交官人生で色々な国の文化、風俗習慣、ものの考え方に接し、一番痛感したこと：

物事を一面的に捉えるな <思いこみ>に陥るな

世界情勢や歴史についても<思いこみ>に陥っていることが多い：

日本人は欧米人の色めがねを通して世界を眺める性癖あり

<歴史>

I 十字軍

II コロンブスのアメリカ発見

<今日の世界情勢>

I イラク：①「大量破壊兵器の破棄」問題と「テロの温床」との理由で攻撃したが

⇒②「サダム・フセインを排除し民主化」に切り替え

II ミャンマー情勢の虚像と実像

・「国造り」と国際社会の関与のあり方

(1) 国家体制の基本、「国のありよう」は当該国民の自覚と責任に委ねるべきであり、外国から指図を受けるべきではない ∵歴史、文化、国民性、民族感情に結びつく。まさに国のアイデンティティー：部外者が<思いこみ>で見当違いの介入をすると有害

(2) 何時の時代でも、為政者は与えられた状況の下で最善を尽くしてきた：織田信長に民主主義を説いても無意味

(3) 国民の努力を側面支援：ODA、貿易、投資、技術移転、観光、学術文化交流
欧米、特にアメリカは逆のことをやってきた

III トルコについても歪められた国際認識（虚像）が定着

(1) アルメニア人虐殺

(2) クルド問題

(3) キプロス紛争

(4) トルコ・ギリシャ関係とトルコの EU 加盟問題

(5) ヨーロッパ人のトルコ観

・中央アジアからの闖入者

・オスマン帝国の軍事的脅威

・キリスト教とイスラム教の確執

<西洋人の色めがねで眺めるようになった原因>

- (1) アメリカの占領政策と日教組主導の戦後教育（左翼共産勢力の思惑：日本を弱体化する点でアメリカと一致）
- (2) マスメディアの影響：欧米のメディアが世界を席卷
- (3) 文明開化の歴史：殖産興業、富国強兵の旗印のもとに、脱亜入欧を目指して、欧米の文物を懸命に移入：文明＝西洋文明だった 日本人の関心は西洋に向けられた 舶来品が珍重され、洋行帰りが巾を利かした

<国のありよう 日本はどうあるべきか>

- (1) 国家としての独自の立場、政策を明示すること
- (2) 独自の文化を打ち出すこと。それには愛国心＝決して国粹主義に非ず： 国家に対する誇りと愛着 国の威信を重んじ独立国家としての矜持をもつ 屈辱への反発 歴史への熱い思い （現状は私利私欲、利己心のみ強く、国益の観念とそれを守る意思欠落）